

郷土の歴史 369

八潮の地名考

古新田の地名 その巻



古新田 現八潮市大字古新田 古利根川(大場川) 右岸の沖積地に位置し、自然堤防上に集落が分布した。古くから利根川の渡河地として、早くから発展した地域で、応安5年(1372) 11月9日「旧大称宜家文書」などにみえる「大塚岡」の津(湊)が置かれた。また古新田の対岸猿ヶ又御厨にも河関が置かれ、舟運の津(湊)として栄えたが、出津(古新田)などは河関に因む地名と見られる。

大瀬新田 近世初期から寛永4年ごろまでの地名。近世初頭は、崎西部八條領之内大瀬村字新田と唱え、寛永4年(1627)に大瀬村より村切りし、独立村となった。その当初は、八條領之内大瀬新田と称し、正保年中(1664~48)に埼玉郡八條領古新田となる。「新編武蔵風土記稿」では「古新田ハ寛永四年大瀬村ヨリ分村セシトイヘト、正保ノ改ニ見エス、元禄改定ノ時、初テ新田村ト載ス、サレ

ハ其ハシメ大瀬村ニ属シテ大瀬新田ト唱ヘシヲ程ナク一村トセシナラン」と記されるが、寛永4年の検地のおり村切りをした事が検地帳で分かる(大瀬高橋家文書)。また「正保年中改定図」には記されていないとされるが、「古新田」と記され、「元禄年中改定図」には「新田村」と記される。また明治9年(1876)頃の「村誌」によると「八條領大瀬新田ト称シ、万治年中ノ頃本郡二属シ、村ヲ改メテ古新田ト唱フ」と、万治年間(1658~61)に古新田と改称したと記されるなど、これまで不確かであった。

古新田 寛永4年から明治22年にかけての村名。村名は、大瀬村の古い新田に因む地名(八潮市史研究4)。支配は、天正18年(1590)からは徳川支配の代官の管轄となり、寛文2年(1662)から明治維新(1868)まで、旗本森川下総守領であった。村の東から北は大瀬村・西は折村、南は中川を界して葛飾郡猿ヶ又

村(葛飾区)と隣接し、東西8町(約872メートル)・南北7町の村であった。寛永4年の検地では、村高302石7斗4升3合反別44町4反9畝、内田が33町9反29歩の水田優位の村落。年貢の石盛りは田が上10・中8・下6、畑が上7・中5・下3・屋敷10。その後の石高は、「武蔵田園簿(1646)」には「古新田」として村高318石余、「元禄郷帳(1696)」では「古新田村」と記し石高は変わらず。天保6年(1835)次の家数45軒、外に寺4軒・寮3軒・人別395人、名主役高42石(八條領村鑑)。高札場は村の東部の水戸脇街道沿いにあった。

明治維新期の明治元年(1868)から武蔵知事桑山圭助の管轄となり、同2年より小菅県、同4年埼玉県となり、同12年から南埼玉郡大瀬村、明治22年(1889)の町村制ののり南埼玉郡潮止村の大字となる。明治9年(1876)頃の古新田の村勢を「村誌」で見ると、税地は42町1反余、戸数54戸、人数299人、舟30艘、物産は米223石、大麦33石などであった。

文芸欄

呉美代選

市民の皆さんの投稿をお待ちしています。 [応募先] 〒340-8588 八潮市中央1-1-1 八潮市役所広報課広報係

詩

道 八潮五 西森八重子 夢を追い、都会にあこがれた しかし病に冒され 夢を捨てねばならなかった 私十代 夫と出会い 二人で支え合いながら生きた あれから四十年 とつぜん夫を失った 私たちが播いた種が芽を出し すくくと伸びて花を咲かせた 娘というかけがえのない花だ 時を経て、やがてその花が 初々しい花を咲かせた 孫娘である 風に揺れながら 未知の空へはばたこうとする花よ

短歌

私は私の道を歩いていこう たしかな私の足跡を残して 鶴ヶ曾根 安藤 知晃 凶刃に命絶たれし児らよ嗚呼 悲憤慷慨遺る方も無し 八 條 種村 幸子 いつも見る夢より醒めて現へと 角を曲がればあの頃の路地 南川崎 小野塚喜代子 信号なきノサツ岬へ向う道 馬鈴薯畑の果てなくつづく 南川崎 伊本 則子 枝豆の色ささげと夜の卓 一日のつかれやわらくごとく 鶴ヶ曾根 斉藤 道子 生垣を潜り十葉の花漬し 猫の親仔は通路つくれり

俳句

柳之宮 平沼 良子 わが腕に無心に眠る孫の世は 安らかになれと切に祈りぬ 南後谷 杉村 セツ 信じ合う旧友の便りに励まされ 展示会への作品を練る 西 袋 鈴木 厚子 いくとせぞ手塩にかけし我が娘 慣れし家より今日嫁ぎゆく 南川崎 松谷 永子 梅雨はれて叔母、妹と水元へ 自転車であうあやめ見物 八潮七 深泉 清 手術室に入りゆく妻を見送れば 小さく手を振りわねに笑みたり 中央一 猪瀬 利助 爛漫と桜咲き盛るときなれば 妻亡き身には寂しさ身にしむ 木曾根 高谷 多門 病名を明かさむとして眼閉じ 友はかすかに咽もとで告ぐ

俳句

二丁目 平井 石龍 妻病みて梅のみ多し梅雨の窓 点滴が命を刻む梅雨の窓 中央一 山角 微陽 何も彼も一瞬のこと草若葉 八 條 杉村 知香 鈴蘭の野に埋もれてみたき夢 真つ白なワイシャツ光る更衣 緑町五 加藤 龍子 窓とドア残して茂る葛若葉 夕陽染めぬ船の夏の川 八潮七 小倉 孝義 梅雨入りやまた三面に見出し 大曾根 白方美代子 買い初めの小銭握りし孫三歳 大曾根 横山 英道

俳句

国技館力士の職風に揺れ 木曾根 古根 昌明 ガムのごと噛みて懐しの秋 緑町五 村田 恭子 夏めくやローマより来しエアメール 上馬場 会田いね子 つゆ近し街には傘の花が咲く 南後谷 小田三重子 花のなき庭にあじさい色づきぬ 大曾根 椎野さち子 巢立鳥親呼ぶ声に風立ちぬ 緑町五 藤波 ふみ 衣更え瘦身のわれ影老いぬ 鶴ヶ曾根 斉藤 初子 六月や三時のままの古時計 母の日や泥手で受ける送り物 大曾根 斎藤 初子 避けて、感性に訴えるようにお作り ください。 ・前号の岡本さんの詩「火花」の一行目に誤植がありました。お詫び申し上げます。

松伏町 越谷市 草加市 三郷市 吉川市 行ってみたいな となりまち 近隣4市1町のイベント情報をお届けします。ぜひ、お出かけください。

郷土の歴史 370

八潮の地名考

古新田の地名 その式



大字古新田 明治22年(1889)から現在に至る八潮市域の大字名。近世の村の古新田が、町村制の実施にともない、南埼玉郡潮止村の大字となり、現在に至る。なお大正15年(1926)に古利根川(中川)が直道に改修されたおり、古新田が二分された。

称宜家文書などにみえる大界関(湊)の津(湊)が置かれたこと。因む地名。明治9年頃の「村誌」でみると、出津は「村ノ東ニアリ東西四町四十間、南北式町五十間」と記され、1、86、1152番地の区域で、現在の字地。大正5年(1916)に金町製瓦株式会社(後の日本煉瓦会社)が金町より移転、社員住宅が建てられ「会社」と呼称された。堤外・字堤外 中川堤の堤の外側に因む地名で、「村誌」でみると「村ノ南ニアリ東西九町、南北九町式十式間」と記され、87、161、1151番地の区域で、現在の字地。

番地の区域で、現在の字地。清水田・字清水田 清水田は、古利根川の自然堤防が発達した畑作地域で、所々に散在する田に清水が湧きでたところから「因む地名」と「村誌」に「村ノ南ニアリ東西式町拾間、南北式町拾間」と記し、877、934番地の区域で、現在の字地。六町田・字六町田 六町田は、東西あわせては6町(648メートル)ほどの水田の広がりに因む地名で、大きい水田が分布することによる。なお、中区・長割・小瀬区なども水田の形状や面積を表す地名である。「村誌」に「村ノ北ニアリ東西式町四拾間、南北三町」と記され、786、819番地の区域で、現在の字地。

型(60間×6間)水田の分布に因む地名。「村誌」に「村ノ乾ニアリ東西三町式拾間、南北式町拾八間」と記された区域で、昭和12年からは字仕込となる。小瀬区 小瀬区は、小瀬町とも書かれ小面積の水田が分布することから「因む地名」。「村誌」に「村ノ北ニアリ東西三町、南北三町拾五間」と記された区域で、昭和12年からは字仕込となる。仕込・字仕込 仕込は、道路や水路で周囲を巡らしたことに因む地名で、「村誌」に「村ノ北ニアリ東西五拾間、南北式町三拾間」と記される。潮止村耕地整理後は中区・長割・小瀬区・土腐などは字仕込となり、308、608番地の区域で、現在の字地。

文芸欄

呉美代選

詩

父 伊草 中山 靖子
病院へ駆けつけると父はげっそり
痩せて小さくなっていった七夕の短冊が雨に震えたその日、父は息を引き取った享年八十三才

短歌

はばかりず大気汚染に加担して
しつぺ返しに猛暑にあえぐ
八條 種村 幸子
用水に水滴たされる時期となり
曾て吞まれし子ら思い出す
柳之宮 栗原 幸子

俳句

二丁目 平井 石龍
陽炎や揺れば揺る老の影
鳥帰る八十路の月日振り返る
中央一 山角 微陽
惜しまれて白バラ落ちし日の静か
緑町五 村田 恭子

俳句

大曾根 横山 英道
里山の小川のほとり夏帽子
木曾根 古根 昌明
風鈴を吊し夕風待ちにけり
八潮七 茂村 つ留
熱帯夜寝つけぬままに句を拾う
八潮七 小倉 孝義

市民の皆さんの投稿をお待ちしています。
【応募先】〒3440-8588 八潮市中央1-1-1
八潮市役所広聴広報課広聴広報係

草加市 松伏町 三郷市 吉川市 越谷市
○草加市演奏家協会設立記念コンサート
○夏休み子ども映画会
○サンシティクラシック ティータイムコンサート